
魔法先生ネギまＺ！

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま～！

【NZコード】

N4774Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

とある姫がネギまの世界に舞い降りた！彼女は人を鍛えるのがめちゃくちゃ上手い！彼女はめちゃくちゃ強い！だが重要な戦いは鍛え上げた弟子に大体任せること！それが彼女である！

プロローグ（前書き）

この小説を読んだらぜひ感想をください。
お願いします。

アドバイスなどをいつぱいください！

プロローグ

今、ある女性が超天才科学者の部屋の前に来ていた。

この女性が超天才科学者の部屋に来ていたのは暇だからである。

「博士、部屋に入つてよろしいかしら？まあ駄目と言つても入りますけど。」
ガチャ。

有無を言わさずにこの女性は部屋に入った。

「ちょっと！？今は次元転送装置の調整を・・・そもそも今は入っちゃ駄目ってゆう貼り紙が扉に貼つてなかつたかい！？」
「別に貼つてしまんでしたわ？」

ブーウ ブーウ ブーウ

「ヤバッ！？」

「あら？」

カツ！シユウウウウウウウウ

「次元転送装置がちょっと暴走して転送しちゃつたよ……まつ、いつか。」

博士の次元転送装置の暴走により女性は何処かの次元へと転送してしまったのだった。

「ちつーあのクソ科学者あーよくも転送装置暴走させやがりましたわねー！」

勝手に入ったこの女性の責任だと思つがこの女性は科学者に責任転嫁をした。まさに暴君。

「…………今何かちょっとイラッとしましたけど……まあ気にしないで今はこの世界の事を把握する事が大事ですわね。」

この女性はこの世界を把握する為に辺りを歩き始めた。

「とりあえずは人を見つけて話をする事ですね。
情報収集には人との会話が一番ですわ。」

この女性はひじやりこの世界を知るためにあたつてまでは人探しを始めた様だ。

「人…人…ん？本をたくさん持つてる子がいますわね。あの子に聞くとしましょうか……あら？」

この女性が本をたくさん持つてる子と話をするためにその子に近づこうとすると言つて本を持つてる子は階段で足をくじき階段から落ちようとしていた。

「ちつ、仕方ないですわね。」

この女性は凄まじいスピードで階段から落ちようとした子をキャッチ

チして助けた。

「おい、大丈夫ですか？」

女性は一応、安否を聞いた。

「は、はい大丈夫です……。」

「じゃあもう貴女を降ろしますわ。」

この女性が本を持つてゐる子を降ろした直後。
少年が女性に近づいて來た。

「あ、あの富崎さんを助けてくれてありがとうございます！」
「別にどうつて事じやないから礼なんていりませんわ。」

女性は全然たいした事はしていないという顔をしている。女性は、
あつ、という顔に突然なつた。

「そういえばこの世界の事を聞こうとして人を探していたんですね。」

この女性は自分の目的をちょっと忘れていた様だ。少年が女性にあ
る事を聞いた。

「一つ聞いていいですか？」

「聞かせたら、ちょっと私も聞いてよろしいかしら？」

「あつ、はい……その頭の上の輪つかはなんですか？」

少年は女性の頭の上に浮いている輪つかの事を聞いた。女性はそれ
に普通に答えた。

「そりや死んでるからに決まってるでしょう。因みに肉体はありますわよ。」

「ええ!? 死んでるって…?」

少年は驚いた……まあ普通は驚くだろう死んでる人が歩いていたら。

「てかこの輪っか見えますの? 普通の人には見えない様にしてもらつているのですけど? 魔法で。」

少年は魔法という言葉に反応した。

「魔法つて…? ちょっとこっちへ来てください。」

少年は女性を連れて木が茂つてる人目がつきにくい場所に移動した。

「何故こんな場所に移動したのかしら? まあ話を聞かせてもらえるなら別に何処だらうと構いませんが。」

「貴女は何故魔法を知っているんですか! ?」

「私達の世界では普通に皆知っているからです。」

「私達の世界! ?」

少年は女性の私達の世界という言葉が気になつた。

「…私はこの世界の住人ではありませんのよ? 異界人ですわね。この世界の人達にとつては。」

少年はいきなりに聞いた事なので女性の言つた事はすぐには信じられなかつた。

「そんな事をいきなり言われても…。」

「まあ、普通はすぐに信じる事は無理ですわね。そういうバカが柔軟性が高い人でないと。」

「そういうバカってありますか……？」

「口答えすると殴ります。」

「ええ！？」

少年は女性がそんな事をさらつと言つたの驚いてビビつた。
しかし女性は少年がビビつたのを無視して話を続ける。

「この世界にも魔法があるようですね。しかし貴方の反応を見る限り秘密にしているようですね。しかし貴方の反応を見る

「あっ、はいその通りです。」

「じゃあそこでコソコソしてるネズミに聞かれてはまずいでしょうね。」

(えつ！？バレてる！？何！？あの人！？)

「誰か聞いてるんですか！？」

「出できなさい！」

女性はコソコソ聞いてる奴が隠れてる茂みに向かつてそういう言い放つた。

すると茂みからオレンジ色の髪のツインテールの女子学生が出てきた。

「……あんた魔法がどうとか言つてたけどもしかして魔法使い！？」

「い、いや違います……。」

少年は魔法使いと女子学生に言われて否定するが…。

「その顔は嘘をついてる顔ね！…ってことは朝のアレはあなたの仕

業ね！」

「ア、アスナさん感が鋭い！？」

「感が鋭いことはやつぱり……。」

「あつ！？しまった！？」

少年は言つちやつたよと焦る……一方、女性は情報収集の会話がで
きなくてイラついていた。

「てめーら人の情報収集を中断させてんじゃないですかよー…まずは
私の話からですわ！」

「す…すみません……。」

「では貴方に聞きます！」この世界は惑星間を行き来できる宇宙船は
ありますか？気は一般的に知られていますか？」

「え……惑星間を行き来できる宇宙船……『』？」

「その顔じゃ無しですわね……。」

「『』の人、何分かんないこと言つてんの？」

「人を頭おかしい人みたいに言わないでくださいな？」

女性はアスナの言葉に対して少しイラつとしてアスナを睨む。

「でもあんた異界人とか言つてたし……中一病？」

ピキッ。

「誰が…中一病ですって…？」

女性はアスナの『中一病』と並ぶ言葉に対しても激しい怒りを見せた
……青筋が浮いていた。

「だつてあんた異界人とか言つてるし……それにまるでお姫さまの

様な服を着てるし……自分の「」をお姫お姫とか思いここんだんの？。

「

ピキッ、ピキッ。

「……私は正真正銘の姫ですわ。」

「漫画の読み……。」

「ブウン……パアウー！」

女性は手に氣を溜め木に向かって氣弾を放つた。

「誰が漫画の読み……ですって？」

「な、何あんた今何やったの！？」

「氣をぶっぱ放しただけですわ……私は中一などでわなべマジなのですよ？」

女性は一ヶ口りと笑いながらも威圧感を漂わせた表情をアスナに向ける。

「貴方どつあえず色々と知つてそうな人の所へ案内してくださらない？」

少年に顔を向け女性は案内を頼む。少年は青ざめた顔をしていた……まあそりゃビビるだらう。

「が、学園長ならたぶん色々分かると思います……。」

「よし連れていくなさい。」

「は、はいー。」

少年はビビりながらも女性を連れて学園長の元へ向かつた。アスナも一緒に何故か連ってきた少年が心配なのだろう。

「フォフオ……異界から来た人とは珍しいの一それにネギ君この方は魔法も知つていると?」

「はい学園長確かそう言いました。それにこの人の世界では魔法は普通に知られているそうです。」

「フォフオ……かなり特殊な世界なんじやの。」

因みに魔法の会話をしていますがアスナは部屋の外にいます。

「じじい、じの世界はどんな世界か早く教えてもらえるかしら?」

「じ、じじじって……その前に貴女の名前を教えてくれんかのう……」

「いちいち貴女やその方では面倒くさいじゃろ?」

「分かりましたわ、私の名はルーン=アシュタリカ=プラネット。」

ルーン姫と呼んでくださる?」

「ルーン姫殿じゃな?ワシの名は近衛近右衛門じゃ。」

「で?貴方は?」

ルーン姫は少年に名を聞く。

「僕はネギ=スプリングフィールドです……。」

「ネギですね。」

ルーン姫は少年の名をしつかりと覚える。

「ルーン姫殿はこの世界のことを知りたいんでしたな？」この世界は魔法は秘密で……。」

「それは分かつてるので別のことを。」

「え……じゃあ……。」

「というかなんとなくもう分かったのでいいです。どうせ秘密利にだけど魔法使いが正義のためにとやらに動いてたりするのでしょうか？」この世界。」

「…………はい。」

学園長はルーン姫の理解力に度肝を抜かれた……そして思った……。

(なんでワシのところへ来たの？)

と……。

「まあ魔法がある世界なら元の世界へ戻る方法もあるかもしけないので適当にさがしますか。」

「あ、ルーン姫殿ワシらが元の世界に戻る方法を調べて見ますから教員をやって見ませんか？」

学園長は突然ルーン姫に対してもう一つ話をきつだした。

「何故そんなことを急に？」

「魔法関連のこと勝手に調べられると問題がありましてのお……それにルーン姫殿は異世界の方なら変わった授業が出来るのではないかと思いまして。」

学園長にやう言われルーン姫は一秒考えた後すぐに答えた。

「別にいいですよ？そんなに急ぐことでもないですしね。それに

しても勝手に調べちゃいけないとか面倒くさい世界ですねー。」

ルーン姫は軽く学園長の案を承諾した。

「フオフオ……ではネギ君のクラスの副担任として頼みますぞ。」

「えつ！？ルーン姫さん僕のクラスの副担任なんですか！？」

「なにか嫌な」とでも？

ルーン姫ニシツ「ココ……しながらネギに聞く。

「いえ、別にあります。」

ネギは「こでだつて怖いからといつ本音を出せなかつた……直感的に」。

本音を出していたら殴られていたらどう？

「ではルーン姫殿明日から頼みますぞ。」

「分かりましたわ……寝床は？」

「住む所ですか……うーん。」

「思いつかないなら学園の敷地内に勝手に作りますわ。」

「え？家とか作れるんですかのう……ああいじょう（じうせん）立て小屋ぐらゐのレベルじゃな。」

学園長は後にその考えが甘かつたと後悔する。

「じゃあさつそく取り掛かりませんと……ネギ先生明日からよひしくお願ひいたしますわ。」

「は、はい。」

こうしてローン姫はネギのクラスの副担任になることが決まったのだった……。ローン姫はこの世界にどう影響を与えるのだろう……。

プロローグ（後書き）

ルーン姫「ルーン姫のじつやつたら強くなれるかコーナー！強くなりたい人は是非私に聞きなさい！」

作者「まだ誰もいないんですけど……。」

ルーン姫「……はあ！」

ドッパン！

作者「いじまおー！？」

ルーン姫「読者の皆さん次回もこの小説をお読みなさい！」

一時間田 副担任姫は暴君！（前書き）

作者「学園長がかなり酷い田にあります。
別に学園長が嫌いなわけではありませんよ。」

一時間田 副担ルーン姫は暴君！

チュン…チュン…チチチ。

爽快なまでの青空…ルーン姫はベッドから体を起こす。

「ん~いい朝ですわ！早速行くとしましようか。」

ルーン姫は自分が作った豪邸の様な家から麻帆良学園の自分が副担となつたクラスに軽く朝食を食べ向かう……とつぐに遅刻してゐる時間がだつたが。

「おはようございますわ。」

「ルーン姫さん！もうHR始まつてますよ！」

「まあ別にいいじゃないですの？ちょっと寝坊したぐらい。」

「ダメですよー！」

ネギはルーン姫が遅刻したこと注意到るがルーン姫は知らん顔をする。

「ちょっと貴女！ネギ先生の副担であるのにも遅刻をすることはひとつですのー！」

ネギのクラスのクラス委員長である雪広あやかがルーン姫に物申しだ。

「貴女……ちよつと私と喋り方を被らせるのやめてくれませんかし
らひ。」

いやそこまで被つてはいないと思われる。

「貴女と私じゃ全然違いますわー。」

「わをつける所が被つているんですねー。」

「け、喧嘩は止めてください。」

ネギがルーン姫と委員長を止める。委員長はネギに言われたので大人しくなった。

「ネギ先生が言つなり……。」

「あら貴女のネギに対しての反応……もしかしてショタコン?」

静まりかけた喧嘩の火種に油を注ぐルーン姫。委員長は青筋を浮かべ頬をひくつくかせた。

「だ、誰がショタコンですってえーーー!」

「委員長がショタコンなのは同意(笑)」

アスナがさらにもう一度油を注ぐ。

「ア、アスナさん貴女までえーーー!」

「間違つたこと言つてないじゃん?」

委員長とアスナの喧嘩に発展しそうとしていた。ネギがオロオロ慌てる。

「あわわ…止めないと。」

「全く喧嘩なんてガキですわねえ。」

そもそもの発端はルーン姫だし。ルーン姫も喧嘩しようとしていたのだが…。

「ル、ルーン姫さん。喧嘩を止めてください…。」

「しゃあないですわね…一人ともお止めなさい。」

ボカツ ボカツ

ルーン姫は一人の頭をこづき喧嘩を止めさせた。

「いつたあ！」

「痛つ！…ちょっと貴女体罰をいともたやすくやるとは教師としてどうなんですか！？」

委員長がそうルーン姫に言つがルーン姫はだから何？…という顔をしていた。

委員長の怒りはそんな態度を見てさらに増した。

「貴女教師としてふやけ…。」

「私はルーン＝アシュタリカ＝プラネットといいますわ。これからこのクラスの副担任になるのでよろしくお願ひいたします。」

ルーン姫は委員長を無視して自分の自己紹介をした。

ルーン姫はどうやら委員長の相手をするのが面倒くさくなつた様だ。

「委員長さん。ルーン姫さんが失礼なことをして申し訳ありません

「僕が担任として後でちゃんとお話をすからどうか」リサ
「…………。」

「ネギ先生……そんなにお氣を使われなくとも……姫？」

委員長はネギがルーン姫に対して姫をつけるのが気になつた。

「何故あのルーンという人に姫をつけているのですか？ネギ先生。
「ルーン姫さんは本当のお姫さまらしいです。
「本当の姫！？なんでそんな方が教師をしているのですか？」
「それはちょっと言えません……。」

ネギは委員長の問いに答えられなかつた……そのことについて言つ
と魔法のことにつれてしまつからである。

「ルーン先生つてお姫さまなのー！？」
「何処の国のですかー！？」
「姫が教師をしている…………」リサやスクープだ！

ルーン姫が本当の姫といふことがクラス中に聞こえたためルーン姫
は質問ぜめにあうが軽く一言で一掃した。

「いわゆる二〇。」

その一言は落ち着いてはいたが明らかに怒気がこもつていた。
ルーン姫は質問ぜめがそつとうつとうつとおしかつた様だ。

「生徒にうるさいって……感じ悪いな。
「質問答えたつていいじゃん。」

生徒達はルーン姫がつむさいと自分達の質問を一掃したことでルー

ン姫のことを感じ悪いと感じていた。

「「つむかこと言ひのは当然でしょ?」一気に質問せめにされねば?
質問するなら一人ずつ一個までです。」

ルーン姫の言ひことに一理あつたので生徒達はルーン姫に気をとりなおして質問する。

「ルーン先生はいくつですか?」

「忘れました。」

「ルーン先生は何処のお姫さま?」

「プラネットのです。」

「プラネットって何処にあるんですか?」

「この世の何処かにはあります。」

「何処かじやわかりません。」

「じゃあ自分で探しなさい。」

ルーン姫は生徒達の質問に対してきぱきと答えていった。
そしてクラスの大体が質問をし終えた。

「質問まだしていない人達はもういいのですね?」

「あ……あの……。」

「なんでしょうか?……あら?貴女はあの時の本の子ではないですか?」

「か?」

「私、富崎のどかです……あの時は助けていただいてありがとうございました。」

のどかはルーン姫に階段で落ちそつになつた時助けてもらつた時の
礼を言った。

「別に礼を言われるほどのことはしていませんわよ。
でも助けてもらつた相手に対して礼を言つことは大事ですわね。」

「はい、では皆さんこれからルーン姫先生をよろしくお願ひします
ね！」

ネギは生徒達に対してそう言つたが生徒達のルーン姫に対する印象
はあまりよくなさそうだった。

五時間目授業…ルーン姫が授業をしていた。教科は数学。
授業は上手くいかないと思われていたが……。

「で…あると言つことですね。まき絵さん分かりましたか？」
「分かりました！ルーン先生の授業って凄く分かりやすいです！」
「ふふ、そうでしょう私は人になにか教えるのは大得意ですから。」

ルーン姫は人になにか教えるのは得意分野だったのでバカレンジ
ヤーのまき絵ですら分かりやすい教え方をしていた。
実際他の生徒も分かりやすいと感じている。

「ルーン先生教えるのめちゃくちゃ上手っ！？」
「アスナはルーン先生の授業分かった？」
「スッゴイ分かりやすいわ！」
「くつ、アスナさんですら理解できる授業をするとは…悔れません
わルーン先生。」
「ちょっと委員長、今の言葉引っ掛かるんだけど?」

アスナは委員長の言葉に対し反応し喧嘩が始まりそうになるが。

ボキュー・ボシュン。

ドサッ。

「私の授業中に喧嘩始めよ!としてんじやないですわよ。」

ルーン姫はアスナに向かってチョークを凄まじい早さで投げていた。アスナの額に当たったチョークは粉となり消え去った。そしてアスナは気絶して倒れてしまった。

「今度はどうぞ」と眠り始めましたか。
たたき起こしてやりますわ。」

ルーン姫はアスナが居眠りをしたと思っていた起き起こをうそにする。

ルーン姫が投げたチョークが原因なのだが……。

「いやー?」これアスナ気絶します!?
「氣絶?どうしてですか?」
「たぶん先生が投げたチョークが原因かと……。」
「あの程度の威力で気絶とは情けない。誰か一応アスナさんを保健室に連れておいきなさい。」
「あつ、はい連れていきます。」

保健委員の和泉亜子がアスナを保健室に連れて行つた。

「全く……最近の(この世界)子はある程度で……たるんでいますわ。」

ルーン姫のこの言葉に生徒達は大体全員いつ思つただりつ……。

(チョークが粉々になる威力での程度！？)

と…

この後ルーン姫は氣をとつなおして始めての授業を無事にやつとげた。

「授業ちゃんとやれてたじやないですかルーン姫さん！アスナさんが何故か保健室に行きましたけど…。」

「あれはアスナが悪いんですわ。」

「誰が悪いって？」

アスナが怒った表情でルーン姫の後ろに立っていた。
やつぱりチョークをぶつけられたことを怒つてこらのだろう。

「確かに私が喧嘩を始めようとしたのもちよつと悪いかもしれないけど…チョークをあんな勢いよく投げないでいいんじゃない？」

確かにチョークが粉々になる程の勢いで投げつけるのは普通はやりすぎというか普通はできない。

しかしルーン姫は悪びれた顔もせずに言い返す。

「あの程度の威力で気絶する貴女が悪いでしょ？」

「なつ！？」

「私にとつてあの程度の力は本つひとつに手加減してやつているのですよ？」

「あれが手加減つて…あんた一体どんぐらい力あるのよ！？」

アスナは一体ルーン姫はどれぐらい力があるんだと驚くがルーン姫はそれを無視した。

「じじいの野郎は少しばかり私が元の世界に戻る方法について進展はありましたかねえ…。」

「まだ一日しかたつていませんよ…。」

ネギは昨日今日じやさすがに無理だろうと思つただが…。

「昨日今日だから少しの進展もないなんて私は許しませんわ。私は別に元の世界に戻るのを急いでいませんけどだからといって手を抜かれるのは腹がたちます。」

ルーン姫は昨日今日からは進展しない理由にならないとかなり無茶なことを言った。

たぶん学園長はまだ昨日今日だとして思つて元の世界に戻す方法を調べていないだろ？

御愁傷様 学園長…

「ちよつとじじいの所へいつて聞いてきますわ。」

ルーン姫はそう言って学園長室に向かつていった。

ネギはそれを見て大丈夫かな学園長……。

と思うのだった。

「言い残したいことはそれだけですか？」

ローン姫が学園長に元の世界に戻る方法のことの進展を聞いたら学園長は案の定『えつ？ だつてまだ昨日今日じゃん』と答えたのだ。

ローン姫は当然その答えに激怒した。

「マジすんません……だから命だけは……。」

学園長はローン姫に命乞いをする。

卷之三

ルーン姫のその言葉に学園長は瞬安堵したが……。

「ただベッドの上で十年ぐらい喋れない状態にするだけです。」

学園長はローン姫の目を見てそれをやめないとしたがマジだと分かつたので更に恐怖した。

「ちよつと待つてー!?」……そうだ葉加瀬聰美ちゃんなら元の世界に

戻る方法とかどうにかなるかも！」

「葉加瀬聰美?……ああ、ウチのクラスに確かいた子ですわね。」

ルーン姫は確かにクラスにそんな子いたなと思いかえす。

しかしルーン姫は何故にその子が元の世界に戻る方法に関係するんですの?と思つた。

「その子は天才でのうロボットとかも作つてある。」

「ああ、天才だからどうにかできると?」

「はい…そうです。」

「考え方があまりすぎますわー!」

バキイツ!

ルーン姫は学園長を思いつきり殴りあげた。

学園長の安易な考えが相当にイラついたようだ。

「うふうー!?

「まあ、でもどうあえずその子に会いにいきますか。」

だがルーン姫は何もしないよりはマシだといつて葉加瀬の所へ行くことにしたようだ。

「結局行くならワシ殴らなくていいじゃん…。」

「何か言いましたか?」

ギロッ

ルーン姫は学園長を鋭く睨み付ける学園長はその威圧感になんでもありませんと答えるしかなかつた…。

「さて、そのままの所へ行きたいですが今は何処へいるんですかね？」

ルーン姫はもう今の時間帯だと生徒達は大体下校してるので葉加瀬は何処へいるのか学園長に聞く。

「麻帆良学園大学部のロボット工学研究会にいると思いますがの？」
「じゃあ早速、行きますか！」

ルーン姫は葉加瀬の元へ行こうとするが…。

「あのう……。」

学園長が呼び止めた。

「なんですか？」

「家建てていいとは一応言いましたが……あのサイズはちょっとと…。」

「ベッドの上で十年。」

「なんでもありませんでしたあーーー！」

学園長はルーン姫に屈服するしかなかつた。

ルーン姫はぐだらないうことで引き止めないでくださいる?といつ顔をしたあと麻帆良大学部に向かつた。

「ルーン姫殿……暴君すぎじゃ。」

「「」」が麻帆良大ロボット工学研究会ですか…。」

ルーン姫は辺りにあるロボットを見て思つた…。

「レベル低っ！あつ、口に出ましたわ。」

思わず口に出してしまったルーン姫。

当然この言葉にもの申す人はいるだろう。

「レベルが低いって失礼ですよー！」

このルーン姫にもの申した人物は葉加瀬聰美。

ルーン姫が現在探している人物だ。

「探す手間が省けましたけど…」この程度の科学力では期待できませんわね。

天才が関わっているといつものだから期待してみればこの程度ですか。」

ルーン姫は更に相手を煽る言動を放つ。

「この程度つて…じゃあ貴女には何かできるんですか！」

葉加瀬はさすがにキレた。

まあ…こんなに言われれば当然だらう。

ルーン姫は葉加瀬の言葉に平然とした顔をして答える。

「できますわよ？この程度の科学より上の物を作る事なら？」

「じゃあやつてみてください！？」

「じゃあやります。」

ルーン姫は設備や材料を勝手に使い何かを作り始める。

足りない材料は学園長名義で取り寄せていた。

後で学園長がルーン姫殿マジ酷い！？と言つのが目に浮かぶ。

「よし！完成しましたわ。」

ルーン姫は自分の作りあげた物を見ていいできですわ。
…と満足する。

葉加瀬はルーン姫の物を作る過程を見ていたが理解できないことが多かった。

つまりルーン姫は葉加瀬よりも上といつことになるのだ。

「それは一体何ですか！？」

葉加瀬はルーン姫が作ったものが何かを聞く。

葉加瀬の目は輝いていた。

自分にとつて分からぬ技術で作りあげられたものが気になるのだ
うう。

科学者なら当然の反応である

「惑星間も普通に行き来できる宇宙船ですわ。

生体反応をキヤッチして生命が住んでる星を探せる機能もつけてますわ。

当然、お風呂もトイレも完備していますわ。

あと重力トレーニングもできるよ！」重力コントロール装置もつけてますわよ。」

ルーン姫が作った宇宙船は明らかにこの世界の科学レベルを越えたものだつた。

葉加瀬はルーン姫が作った宇宙船の機能を聞いて目を更に輝かせた。
「広い宇宙の中で生体反応をキャッチ！？惑星間を普通に行き来できる宇宙船！？…ということは宇宙人に普通会えちゃうじゃないですか！？」

葉加瀬は興奮覚めやらなかつた。
これだけのことを聞けば当然か。
科学者じゃなくてもワクワクすると思つし。

「それにしてもこんな技術を持つてるなんて……ルーン先生、貴女は天才科学者ですか！？」

「いや、私は科学者じゃないですけど、私は姫ですわ。」

「お姫様が普通は宇宙船なんて作れないと思うんですが？」

葉加瀬のその言葉にルーン姫はふふんとして答えた。

「私が宇宙船を作れる理由…それは私が幼い頃に自分の星を抜け出して別の惑星にいき悪の組織を潰して遊ぶ…そんなことをする姫はルーン姫以外に存在しないだろ？」

ルーン姫はかなりあれなことを笑顔で言つた。

宇宙をまわつて悪の組織を潰して遊ぶ…そんなことをする姫はルーン姫以外に存在しないだろ？

「普通、お姫様はそんな遊びしないと思ひます！？」

葉加瀬は当然の反応をした。

悪の組織を潰す遊びをするお姫様なんていなうそれが普通のことだ

し。

「大臣も同じようなこと言つてましたわねえ。

それで何故か私が星に帰る度に大臣の奴お腹押せえてましたわね？」

姫が悪の組織潰すとかいう遊びをすれば当然である。

大臣の冒のライフはルーン姫が悪の組織潰す遊びに行くたびに削られていつたんだろう。

「では、葉加瀬さんちよつと一緒に宇宙船に乗つてみましようか？見るだけではその性能が本當か分からぬでしょ？」

「そうですね。確かに実際に体験してみないと。」

「じゃあ乗りますよ。」

ルーン姫は葉加瀬の腕を掴み宇宙船の中に乗り込む。

「飛び立つ前の準備しなくていいんですか！？」

「近場に行くだけだから大丈夫ですよ。

たぶん。」

「たぶんつて！？」

近場と言つてもこの広い宇宙では時間は凄くかかる筈なので葉加瀬は不安になる。

しかしルーン姫は葉加瀬のそんな不安など無視して普通に飛び立つた。

「宇宙の藻屑になつたらどうじよつ…。」

葉加瀬はそんな風に暗くなつていたが。

「つきましたよ。」

「えつ！？はやつ！？」

葉加瀬は地球を飛び立つてから間もないにもうついたことに驚いた。

「地球から一番近い星に範囲を絞つたのですから早くて当然でしょう？」

「それにしたつて早すぎです！」

葉加瀬がそれにしたつて早すぎと叫ぶのは当然である。

惑星間の移動が一瞬で終わるのは、どう考えたつて普通はおかしそぎるだらう。

そういう世界にとっての普通は。

「この星は酸素とか普通に大丈夫だから外にでても平気ですわよ。

葉加瀬さん。

まあ私は何処でも平気ですけどね。」

ルーン姫は外の環境を調べて葉加瀬に外にでても平気だと言つ。ルーン姫が何処でも平気と言つるのは恐らく死人だからと言つ意味ではないだらう。

だつてルーン姫だし。

「ん？… 気が消えますわね。

葉加瀬さん。やっぱり貴女は宇宙船の中にいなさい。
死にたくないなら。」

ルーン姫は眞面目な顔をして葉加瀬にそう言つた。
葉加瀬はルーン姫に対してもう言つた。

「未知が田の前に迫つてゐんですよ！ 危なくたつて私は外にでます
よ！」

ルーン姫はちよつと考へたが… まつ、いつかと決断した。

「こJの程度の力の奴なら葉加瀬さん守りながらでも戦えますしね。
じゃあ葉加瀬さん連れて氣の消えてる場所に向かいますか。」

ルーン姫は葉加瀬を掴むと氣の消えてる場所にへと飛んでいった。

「ルーン姫さん飛べたんですか！？」

ルーン姫は当然、葉加瀬のそんな言葉を無視する。

「せつせつこJの世を全て汚くするすべを書いた本を渡すんだ。」

「我らクツリーン星人がこの世の汚れに対抗するために調べあけた
世の中のものを汚くする方法が書かれた本を貴様らドロツヘ星人に
渡したらこの世のあらゆるもののが汚されてしまうんだ。
渡せるものか。」

「汚れた世界……想像するだけで心地いいじゃないか。」

「いや、心地悪いですわ。」

「なんだ貴様！？」

「まず自分から名乗りなさいな。」

ルーン姫はまず宇宙人に名乗れという。

宇宙人はふふ…と笑いながら自分の名を語る。

「僕はこの世を汚ぐする宇宙の帝王ドローゼ様だ！」

ルーン姫はふーん…ぐらいの反応をした。

ドローゼは若干不満そうな顔をした。

「！」の僕が自己紹介をしたのにその反応…ムカつくね。」

「ルーン先生、あの宇宙人。不機嫌そうですよ！？」

葉加瀬はルーン姫がドローゼに対して挑発的な態度をとるのを心配した。

相手は宇宙人だ。怒らせるとどうなるか分からぬからだ。

「さつやと！」の星から消えなさいな。

クズ野郎ども。」

ルーン姫はドロツヘ星人達に対してそんな発言をきました。
葉加瀬は挑発的すぎますよ！？とルーン姫に対して思つた。

「ふう…身の程知らずだね。君は……殺れ。」

ドローゼは部下にルーン姫を殺すように命令した。

部下はルーン姫に対してもエネルギー弾を放とうとする。

「戦闘力たつたの五、ゴミだな死ね！」

部下はルーン姫の戦闘力を機械で測つたあとルーン姫をゴミだと馬鹿にしてルーン姫にエネルギー弾を放つた。
…だが。

「誰がゴミですか。」

ルーン姫は片手で軽くエネルギー弾をはじいた。

ドローゼの部下は驚いた表情になつた。

戦闘力五のゴミと思った奴にエネルギー弾をはじかれたのだから。

「なに！？」
「はあ！」

ルーン姫は凄まじいスピードでドローゼの部下たちを一瞬で倒した。

「中々やるようだね君。どうだい？僕の部下にならないかい？」
「お断りですわ。」
「じゃあ死ぬしかないね。」

ドローゼはルーン姫に対して指からビームを放つた。
…だが。

「この程度で死にませんわよ。」

ルーン姫は軽くビームを握りつぶす。

「なつ！？」

「何が起こってるんですか！？」

ドローゼはいつもたやすくルーン姫に攻撃を潰されたことに驚いた。葉加瀬は何が起こっているか理解できていなかった。

「じゃあさっさと貴方を倒しますか。」

ルーン姫は手を「キキキキ鳴らしながらドローゼへやつくり近づく。

「今のが僕の全力と思つかないよーはあ……。」

ドローゼは姿がどんどん変わり力が増している。ルーン姫はただそれをじっと見ている。

「今のうちに倒さないんですか！？」

「葉加瀬さん。私があの程度の小者に対してもそんなことをするわけないでしょ。」

葉加瀬はルーン姫にドローゼが姿を変える最中が一番の倒すチャンスなのではというが、ルーン姫はなんであんな小者にそんなセコいことをしなくてはならないと返した。

「ふふ…僕が本当の力を見せる前に倒さなかつたことを後悔するがいい！…」

ドローゼがそういうとドローゼの変身が終わった。ルーン姫はやっと終わつましたかという顔をした。

「見せてやるぞ僕のフルパワー……」

と意気込んだドローゼだったが……。

「ぐあああああーーっ！」

一撃でルーン姫にやられたあとルーン姫にサンダバックがわりに殴られていた。

「飽きた。」

そう言ってルーン姫はドローゼを投げ捨てる。

「もう許さんぞ……！」の墨」と消す……。

ドローゼはそうしたあと宙に浮かび巨大なエネルギーの塊をつくりだす。

「この墨」と消えてなくなれ……。

そう言つてドローゼはエネルギーの塊をルーン姫に向かつて投げつけるが。

「か・め・は・め・波！」

かめはめ波でエネルギーの塊ごとドローゼをぶつ飛ばした。

「アハエえええ！……？」

「もう汚くするのはやめます……。」

「分かればよろしく……すみませんね貴方達こいつのことを恨んでいるのに殺さなくて……でも殺せばいいと言ひわけではないですし。」

ルーン姫はドローゼとその部下達を殺してはいなかつた。
ルーン姫は別に残虐……ではないし非道……でもないのだから。

(今なんかムカつきましたわね……。)

「いいのですよ……確かにそいつらは我が同胞達を殺しました……だからといってそいつら殺してしまえばそいつらと同類です。」

クッリーン星人の長老はそう言つた。
まさにその通りである。

「貴方達ー！これからはこの宇宙のために働くのですよー！それが貴方達の償いです！」

ルーン姫は威風を漂わせドロツヘ星人達にそう言つた。
ドロツヘ星人達はその言葉をちゃんと胸に收め自分達の星に帰つて行つた。

クッリーン星をたてなおすドロツヘ星人を残して。

「 「 「 ……あのう。」 」 」

残されたドロッヘ星人は不安だった。

クッリーン星人は星を荒らした自分達を受け入れてくれるのかと…。

「 ……早速この星のために働いてくれい……頼みますぞ。」

クッリーン星人の長老は残されたドロッヘ星人達に早速働いてくれるようになんだ。

ドロッヘ星人達は早速働くとする。

「 働き終わつたら一緒に食事をしましょ。」 ドロッヘ星人の皆さん。

「

長老はドロッヘ星人達に向かつてそう言つた。

「 「 「 ー? ……はい! 」 」 」

ドロッヘ星人達はその言葉を聞くとはりきつて仕事にとりかかった。

「 長老何故あんなことをー? 」

「 憎しみは連鎖させてはならんのだ……貴方もそう思いなのでしょ。」 ルーン殿。

「 ええ、その通りです。

罪を償う意識を持つものに対してもまでも憎しみを持つのは愚かですしお。」

ルーン姫はきつぱりとそう言つた。

「私はとんでもない悪党だつた奴が改心した状態を見た」とありますしね。」

「ドローゼもちゃんと改心するのですかね…？」

「するんじゃないんですの？」

「また悪さしたら今度は死んだ方がマシぐらいな」とこわわせるから安心しなさいな。」

ルーン姫は笑顔で長老に対してもう一つ言つた。

…と同時に長老は思つた。

(ルーン殿…田^ミがマジだ……ドローゼ絶対もう悪事しないわこれ。)

ルーン姫の恐ろしさを感じたであろうドローゼはもう懸念したこと思つて老だつた。

ルーン姫は軽く背伸びをすると葉加瀬の方を見て言つた。

「帰りますわよ。」

「でもこの星にしかないことを調^{アラス}…。」「帰りますわよ?」

「チコリ笑いながらルーン姫は葉加瀬に対してもう言つた。目は笑つていなかつたが。

葉加瀬はそんなルーン姫に対して『はい、帰ります』としか答へられなかつた。

「地球上に帰つて来ましたわねー……なにか私、忘れてる気がするの

ですけど……まあいいですか。」「

ルーン姫は当初の目的の元の世界に帰る方法のことなどすっかり忘れていたようだ。

「この宇宙船は世界に発表すれば受賞ものですよ!」

「でもこれ私の物だから発表なんかできませんけどね。」

ルーン姫はきつぱりと葉加瀬に言った。

そうですね……と葉加瀬はガツカリとした。

「ルーン先生……これちょっと調…」

「べらせませんわ。自分で頑張って研究してここまで物を作りなさいな。」

ルーン姫は調べさせないときつぱり断った。
自分に得がないからである。

「じゃ、宇宙船を持つて家に帰りますか。」「

「うう…凄い技術が…。」

葉加瀬は凄い技術を知りたかったと落ち込んだ。

その頃ルーン姫によって割りを食つた学園長は…

「なんでこんなに請求書が…?…まさかルーン姫殿が…?ルーン姫

殿マジ酷いーーー?」

学園長は大量の請求書に囮まれて苦しんでいたのだった。
ルーン姫はきっと請求書のことあとで言われても無視するのだろう。

一時間目 副担任ルーン姫は暴君！（後書き）

ルーン姫「ルーン姫の強くなりたいなら私に聞きなさい」「コーナですわ！」

作者「まだバトルパートとかないんで無理ですよ……。」

ルーン姫「…ですわね。」

ドローゼ「私が来ましたよー！」

ルーン姫「…バトルパートはいつですかねえ。」

作者「ドローゼさん無視していいんですか？」

ルーン姫「…ちつ。」

ドローゼ「ちつ…とか言わないでもいいじゃないですか！」

ルーン姫「帰れ。」

ドローゼ「そんなことを言わなくとも…私は自分の戦闘力を言いにきたんです。」

私の最大戦闘力は3000万です。」

ルーン姫「あつ、そう。言つたならとつと帰れ。」

ドローゼ「冷たすぎですよ…。」

ルーン姫「読者の皆さん次回もこの小説を読みなさい！そして私に

聞きたかったことがあるなら感想で聞かなさいな。」

ドローゼ「作者さん私の次の出番は？」

作者「99・9%ありません。」

ドローゼ「え――――?」

一時間目 ネギの相談、即解決（前書き）

今回の話しあは短めです。

一時間目 ネギの相談、即解決

「いやー、今日も授業面倒くさかつたですわ。」

ルーン姫は今日も授業を無事におえ家に帰る準備をしていた。
先生として授業面倒くさいに発言はどうかと思つが。

ルーン姫なので仕方がないだろう。

ルーン姫が家に帰つて何をしようかと考えているとネギが話しかけてきた。

「あのー、ルーン姫さん。ちょっと…」

「面倒くさいから嫌ですね。」

ネギがルーン姫に何か言いおえる前にルーン姫は面倒くさいから嫌と答えた。

ネギはまだ全部言つてないのに…?

となつていた。

「じゃあ私は帰つて遊びますので。」

「帰つて遊ぶつて…元の世界に戻る方法はいいんですか?」

ネギはルーン姫が元の世界に戻る方法は学園長が調べると確かに言つたけど元の世界に帰りたいなら自分で調べようとしたしないのかな?と考えた。

ルーン姫はネギの考へることが分かるといつ答えた。

「学園長が調べると言つたので私は全部学園長に任せゐる氣なのですよ。」

ルーン姫のこの言葉を聞いてネギはルーン姫は学園長のことと信頼しているのかな？

と思つたがそれはすぐにぶち壊される。

「自分で調べるのはぶっちゃけダルいので学園長に全て押しつけたいんですね。」

この人はただ面倒くさいから自分で調べようとはしていなかつたんだとネギは理解した。

ネギはルーン姫が面倒くさいから学園長に押しつけたいという言葉はとりあえず忘れて自分が相談しようとしたが最初にかけられたことを叫びつ。

「ルーン姫さん。僕、アスナさんに魔法のことが完全にバレたんですけど…どうしたらいいでしょ？」

どうやらネギはルーン姫が宇宙船やらやつてゐる間にアスナに魔法のことが完全にバレていたようだ。

「帰つたらまずは紅茶でも飲みますか。」

ネギの言葉を無視しルーン姫は帰つて紅茶を飲むことを考えていた。

ネギの魔法がバレたことなどルーン姫にとつてはどうでもこゝようだ。

「無視しないでくださいよ！…ルーン姫さん。どうしたらいいでしょ？」

「バレたならバレたでいいんじゃないのですの？」

ルーン姫は深刻な顔をするネギに対して本当にビックリもよせそうな顔をしてそう呟つ。

ネギはルーン姫のその言葉に對して全然よくなじですよー？と思つが、ルーン姫は全くそんなネギを気にせず口をつむぎと呟くつとする。

ネギはそんなルーン姫の態度を見て思ひきつてあることを呟く。

「アスナさんに魔法がバレたことをビックリしてくればルーン姫さんのお話ひとつをなんでも聞きます！」

ルーン姫はネギのその言葉を聞いて少し考える。

自分がネギに対してもうひとことを聞かせたいことなど特になかつたが、あることを思いついたのでルーン姫はアスナにネギの魔法がバレたことをビックリしてやろうと考へた。

「分かりました。私がどうにかしましょうじゃないですか？」

「本當ですか！？やつたあ！」

ネギはルーン姫がアスナに魔法がバレたことをビックリしてくれると分かつて喜んだ。

そしてルーン姫はネギとともにアスナの元へと向かう。

「ネギの魔法のことは絶対に他人にばらさないようになさい。」

ルーン姫はいきなりアスナに対して上から目線でそう言った。

「私がネギの魔法のことをばらすがどうかなんてルーン先生には関係ないじゃないですか？」

アスナはルーン姫の上から目線も気に入らなかつたのか若干機嫌が悪そうにそう言つた。

「お願いです。アスナさん。魔法のことばどうか内緒に……。」「どうしようかな~。」

ルーン姫はアスナの上から目線の態度にキレた。
せつせつ自分がしていたことなのに。

「人の弱みを握っているから、上から目線の態度…ムカつきますわ！
ちょっと表に出なさい。」

「えつー？ちょっと…。」

ルーン姫はアスナに有無を言わさずに何処かに連れて行つた。
しばらくして。

「あつ、ルーン姫さんと…アスナさん？」

ネギは戻ってきたアスナの顔が恐怖に怯えていたことがとても気になつた。

「ネギ……魔法のことは……ばらさないから……安心して……。」

アスナは力のない言葉でそうネギに言った。

ネギはアスナの今の状態が気にはなるが魔法のことがばらされる心配がなくなつたのでひとまず安心した。ルーン姫はニッコリ笑いながらネギを見る。

「ネギ、約束は覚えてますわよね？」

「あつ！」

ネギはルーン姫にアスナに魔法がバレたことをなんとかしてくれるならなんでも言うことを聞くと言つたことを思い出した。

「えーと……僕は何を聞けば？」

「今はいいです……今はね……」

ルーン姫は深みのある言葉でそう言つたがネギは気づかずに今はいいのかぐらにしか思つていなかつた。

これが後に自分を変えてしまつかけだつたとは知りません。

一 時間田 ネギの相談、即解決（後書き）

ルーン姫「今回の話し短いですわね。」

作者「今回の話はあることへのふせんですね。」

ルーン姫「ああ…」

作者「言っちゃダメですー！」

ルーン姫（じりゅせぬわん分かつてると思いますけど…。）

作者「この小説を読んでくれた読者の皆様。次回もじりゅが読んでください！」

ルーン姫「私の活躍を楽しみにしなさいー！」

三笠題田 図書館姫とローン姫（前書き）

作者「今回も学園長が酷い田にあつてゐるよつた。」

三時題田 図書館員ヒルーン姫

ルーン姫が教師になつてからしばらくたつた…。

今は期末テストが近くなつたためか A以外のクラスはピリピリしていた。

「うちのクラス以外はピリピリしますわねー。」

「期末テストが近いからですよルーン先生。」

「ふーん。 そうですの。」

ルーン姫は特に期末テストに関しては興味がないようだつた。
自分のクラスを一位にしようとかは思わないらしい。
しばらくするとネギがHRを始め期末テストへ向けて大・勉強会を
はじめようつと言いだした。

（ネギの奴、妙にやる気だしてますわねえ…。）

ルーン姫はネギが自分のクラスに一位をとらせたいからやる氣をだす…というものとは違うものを感じた。

（まつ、どうでもいいですか。）

しかしルーン姫はネギの妙なやる氣はどうでもいいと感じしないことにした。

ルーン姫がしばらく様子をボーッと見てるとクラスの面々はアホな勉強法をやつたりしていた。

ルーン姫はそれを見てこのクラスに学年一位なんてほぼ確実に無理ですわね…と思つた。

「なにか面白いものは、ありませんかねー。」

今日の夜、ルーン姫は図書館島を探検していた。

ルーン姫島がこの場所を知つてるのは学園長に本がたくさん読める場所はないんですか？…と聞いて知つたのだ。

ルーン姫が図書館島を探検しているのは何がありそつたからである。

しばらくしてルーン姫は図書館探検部しか知らない秘密の入り口を見つけた。

「おや？いかにもな入り口が……人がほんのちょっと前に通つた形跡がありますわね。

…行つてみますか。」

ルーン姫は秘密の入り口を通り図書館島の地下へと向かつて言つた。

(たく…ネギの奴、魔法が使えないから本当に足手まといよ…。)

図書館島に魔法の本を探しにきたバカレンジャーの一人アスナは食事をとりながらそんなことを考えていた。

バカレンジャーが図書館島に魔法の本を探しにきた理由は次の期末テストで特に酷い点数をとつたものたちは小学生からやり直しどう噂を聞いたからである。

事実ではなくただのデマだが、その変わりネギがクビになるが…。

「ポテチ貰つてもよろしいですか？」

「あっ、いいよ…って！？ルーン先生！？」

まき絵はルーン姫がいたことに驚いた顔をする。ルーン姫は、なにをそんなに驚いてるんですか…という顔をしながらポテチを食べていた。

「なつ、なんでルーン姫さんが！？」

ネギはルーン姫がここに何故いるかを聞いた。

ルーン姫はポテチを食べおえると答えた。

「図書館島を探検していたからです。」

「ルーン先生はどうやつて図書館島探検部しか知らない秘密の入り口を見つけたのですか？」

「ルーン姫は夕映のその質問に対して一応答えた。

…と

「なんとなく見つけました。」

「なんとなくって……。」

「世の中なんとなくで大抵のことは、どうにかなるものです。」

ルーン姫はそのままオニギリに手を伸ばし食べ始めた。

まき絵があることに気がつく。

「ルーン先生、ここまできたってことは図書館島のトラップをぐぐり抜けてきたんですね？」

まき絵はルーン姫が図書館島地下のトラップをぐぐり抜けたことが気になつた。

まあ普通の先生がトラップをぐぐり抜けるのは、おかしいだらう……普通の先生は。

「あの程度でトラップなんて笑わせますわ。

灼熱の業火が噴き出したりビームが色んな角度から放たれたり死の呪文が急に聞こえたりぐらうではないとトラップなんて呼べませんわ。」

ルーン姫がそのまままき絵は。

「RPGじゃないんだからそんなのありませんよ～ルーン先生。」

……と呟つたがそれに対してネギは。

「図書館島のトラップも充分RPGです……。」

…と言つた確かにその通りである

ルーン姫が現れてからアスナの顔が妙に青くなっていた。
ネギはそれに気づきアスナに声をかける。

「アスナさん。どうしたんですか？」

「ああ、やっかしてあの時のことを思ってこられたのですね。」

ルーン姫はネギの魔法がアスナにバレた件をどうにかするためにしたことをアスナは思い出しているのではと思った。

ルーン姫がそのことを言うとアスナは頭を抱えて叫び始める。

「ニヤニヤするなーーー。おやじさん、えええーーー。喋つませんか」

アスナは、あの時のことを思い出して錯乱した。

「ふう…静かになりましたわ。」

「ルーン姫さん…アスナさんに、なにをしたんですか？」

ネギはアスナが錯乱したのを見てルーン姫がアスナに、なにをした
が気になつたが…

「聞いても後悔しませんか？」

…と一ヶ口令しながら言われたので…

「やつぱりいいです。」

…と答えた。

聞いたらなんか後悔してしまってそうだったから。

「アスナ、急にどうしたんだろ？」「

「まき絵さん。どうせ思春期特有の恥ずかしい」とを思い出して、ジタバタしただけですからほっときなさい。」

「そりなんですかー。」

「今のは恥ずかしい」とを思い出して、ジタバタとかじやなかつたと思つのですが…。」

夕映はアスナのあれば恥ずかしい」とを思い出してなつたように見えなかつたがとりあえず今は、その「ことをおことく」とした。

「ところで貴女達はここにをしていますのか？」
お宝探しですか？」

ルーン姫はそうバカレンジャー達に聞いた。

頭が読むだけでよくなる魔法の本を探しにきたのだからルーン姫の言つたことは、あながち遠くはない。

「読むだけで頭がよくなる魔法の本を探しにきたんです。」

「読むだけで頭がよくなる本？」

…ああ、貴女達バカだからその本を使って期末テストでいい点をとらうといつわけですわね。」

ルーン姫はバカレンジャー達に向かってそういう。」

まんまその通りであった。

「しかしそんなものに頼らざるに地道に勉強していい点をとりいとせず思わないんですの?」

「えへへへ、私達バカなので。」

「…まあ、だからそんな本を頼るわけなんでしょうけどね…。」

ルーン姫は、そもそも地道にやる奴が魔法の本なんて頼らないかと思つた。

「ん~……あれ、ここは?..」

氣絶していたアスナが目を覚ました。

しかし氣絶したせいで少し記憶が混乱しているようだ。

「あつ、アスナさん。目が覚めました?」

「ネギ…ここは何処? 私なにしてんの?」

「貴女は自分のバカな頭をどうにかするために、魔法の本を探して図書館島の地下に来ているのですよ?」

ルーン姫は記憶が混乱しているアスナに対してここにいるわけを説明する。

わざと失礼なことを言つた気がするが気にしないでおこう

「そう言えば私、魔法の本を探しに来たんだった!?」

アスナはルーン姫に言われたことで完全に記憶が回復したようだつた。

「しかし魔法の本ですか…いい暇潰しが見つかりましたわね。」

ルーン姫は暇潰しに魔法の本を探すことに決めた。

なのでルーン姫はネギ達とともに行動をとることを決める。

「貴女達、私も一緒に魔法の本を探してよろしくですか？」

ルーン姫はそうアスナ達にそう聞くが、たぶん断つても無理矢理ついていくだろう。

「ルーン先生は、なんで魔法の本を探したいんですか？」

「ただの暇潰しです。」

ルーン姫は、まき絵の問いにそう答えた。

皆は、あつそうですかと思うしかなかった。

魔法の本を探す理由がただの暇潰しじゃね……。

「では皆さん。休憩はここまでにして、さつあと先に進みましょう。」

「

何故かルーン姫が皆を仕切る。

いつの間にかルーン姫がリーダーのように振る舞う。

皆は当然なんで貴女がいきなり仕切っているんですか？

…と思つただろうがルーン姫が威圧感のある笑顔でほら早く先に進みましょと言つたので何も言えなかつた……。

ルーン姫はアスナ達を連れ図書館島の地下深くへと進む。途中様々な難関があつたがルーン姫は普通に突破する。

そしてルーン姫は達はラスボスの間のような部屋にたどりいた。

「立派な部屋ですわねー。

私の城の部屋の方が立派ですけどね。おや？ あそこに本が置いてますわね。」

ルーン姫は本が台座の上に置かれているのを見つけた。

ネギがルーン姫が見つけた本を見ると驚いた顔をした。

「あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！ あれは最高の魔法書ですからちょっと頭を良くするぐらい簡単かも…。」

「最高の魔法書ねえ…。」

ルーン姫は自分が知りうる魔法書よりあれは優れているのかと考えるが自分の仲間の魔導士の書いたものよりどうせ凄くないだろうなと思った。

「本は発見したので私はもう帰りましょーかね…。」

ルーン姫は宝探しは探す過程が面白いのであって宝自体はどうでもいいと思ってるタイプなので本を見つけた今、凄く帰りたくなった。

ルーン姫が帰るのを考えているとネギ達が魔法書の元へ向かっていたが…。

ガコン！ バカンッ

ネギ達は罠に、 はまつた。

「バカみたいに近づくから罠にかかるんですわ。」

ルーン姫はとりあえず罠にかかるんですわ。
ルーンがネギ達の落ちた場所を見るといきなりの元へ近づく。
達はいた。

ルーン姫がなんでツイスターゲーム？と思つていると…

「この本が欲しけば…… わしの質問に答えるのじゃーフォフオフオ。

」

石像が急に動きアスナ達に言つてきた。

ルーン姫は石像の声がどこかで聞いたものであることに気づき石像の正体がすぐに分かつた。

(じじいですわね。)

石像の正体が学園長であることにルーン姫は気づいたが特に何も言わないようだ。

言わないのは単に興味がないだけかもしない。

「——では第一…」

バゴオ！

ルーン姫は石像が何かを言いおえる前に飛び蹴りを食らわせた。

「ルーン姫が飛び蹴りを食らわせた理由それは…

「がたがた言わずに本を渡しゃいいでしうが。
面倒くさい。」

学園長がグダグダするのが面倒くさいだけだった。

「フオ…ひつ、酷い。そんな理由で蹴らなくても…。
「なんか文句ありますか！？」

ダンッ！！！

ルーン姫はそう言って地面を思いつきり蹴った。
威嚇行動のつもりでやったのだろうが…。

ピシ…ピシ…ピシッ。

「あら？…力加減をちょっと間違えましたわ。」

ルーン姫が力加減を間違えたせいで地面にヒビが入りそして…

バカン。

砕けた…そしてルーン姫達は地下深くへと落ちていった。

「ルーン先生、なにやつてんのーー!?」

「こやあ、やつちやいましたね。」

アスナに責められるが悪びれる」となくちつと書く。

ルーン姫は反省はしないようだ。

「やつちやつたじやないですよー?」

「まあ、更なる地下を探検できるから結果オーライといつていいだ。

ルーン姫がそう言つとネギは全然結果オーライじゃなくてひと悶つたがルーン姫に前にネギ達は墜落した。

「…」

ネギが目を覚ますと見知らぬ空間が広がっていた。
そしてなんか聞こえてきた。

「誰にも発見されない場所、絶望エターナル～ 見知らぬ空間、恐
怖エターナル～」

ルーン姫が変な歌を歌つていた。

ネギは、シャレにならない感じがする歌だと感じた。
：現状が現状だから。

「おや？ ネギ目が覚めたんですの。」

ルーン姫はネギが田覚めたことに気がつくと歌つのをやめる。

「ええ… 田は覚めたんですけど… 今はちょっと気分がブルーな感じです…。」

「悪夢でも見たんですね?」

貴女の歌のせいですとは口がさかても言えないネギだった。言つたら酷い田にあわされそうだから…。

「もう言えば私がこの歌をなんとなく歌つたとき『この状況じゃシヤレになんねえんだよ…』…と言われたことがありましたねえ…。」

「

ネギは思つた。

ルーン姫を相手に、びりびりとそんな言葉を言える人は勇者だと…。

「まあ、今の状況はその時の状況と比べるまでもなく全然ヤバくないですね。」

「いや…? マズイですよーだつてここ知らないことにだし…。」

「大丈夫、生命エネルギーを常に吸こいらっしゃる空間と比べたらここは楽園ですよ。」

「いや、そんな凄い空間と比べられても…。」

ルーン姫とネギが会話をしていると他のメンバーも全員、田を覚ます。

「フーん~…… これは?… ってなんなのこの場所!?」

田を覚ましたアスナはこの場所を見て驚く。

落ちてきた天井が凄く高い」とと地下なのに明るいことが主な要因だろう。

「ここは幻の地底図書室…？」

「なんですかそれ？」

ルーン姫は地底図書室について少しうまく聞く。

ルーン姫は地底図書室について少し興味がわいたようだ。

「地底なのにあたたかい光に満ちて数々の貴重品にあふれた。本好きに突破するところはまさに楽園といつ幻の図書館…。」

「ふーん…。」

「ただし、この図書室を見て生きて帰った者はいないとか。」

夕映はちょっと怖みをきかせてそつそつと歩く。

「生きて帰った者がいないなら貴女が知ってるわけないでしちゃうが。いい加減なことを言つてると殴りますわよ？」

ルーン姫にマジ返しされた。

夕映は、ちょっとした冗談のつもりだったのにルーン姫にマジ返しされてビビる。

夕映は気をとりあえず直して「これが脱出困難であることは確かだと皆に伝えた。

「ビ、ビツするアルか？それでは明後日の期末テストまでに帰れないアルよ。」

「それビンカ私たち、このままおうち帰れないんじゅ……？」

ルーン姫以外の者たちは今の状況に動搖したり焦っていた。
ルーン姫はこの地下なにがあるかなと考えていた。

のんきなものである。

「まあ、とりあえずこの場所を探索し出口を探さねばどうか。」

「確かに今はこの場所を探索し出口を探すべきですね。」

ルーン姫の言葉で夕映はこの場所を探索し出口を探すのが先決だと
考えた。

…ただしルーン姫は探索ではなく探検と言つてるので意味合いが
違うが…。

ネギ達は出口を探しこの場所を探索する。

そしてルーン姫は、なにか面白いものがないかと探検する。

ルーン姫だけ遊び気分だった。

生徒のことを思つて出口を一生懸命探すとかは…しないカルーン姫
だし。

「だ、ダメですね。やはりビックからも登れないとよつです。」

「いつも面白いものが特に見つかりませんでしたわ。」

ルーン姫のその言葉にアスナが怒る。

「ちょっとー、ルーン先生が床を壊さなきゃこんなことにならなかつたんだからマジメに探してよー！」

アスナのその言葉にルーン姫は反論する。

「確かにここに来たのは私が床を壊したからでしょう。
でもそもそも貴女達が魔法の本に頼ろうなんて思わなければこうならなかつたのではないか？」

ルーン姫にそう言われるとアスナは強く言えなくなつた。
自分達が地道な努力をして魔法の本など求めなければこうならなかつたのも確かだから。

「まあ、とりあえず勉強でもしましちゃうか?
なにもしないよ今はマシでしょ。」

ルーン姫がそう言つと皆は確かになにもしないよりマシだと思い勉強することにする。

「私が貴女達を落としてしまつたお詫びにみつちりと勉強を教えて
るしあげましょ。」

ルーン姫は、そう言いアスナ達の勉強を見ることにした。

…これからスバルタな勉強会が始まる。

ルーン姫が勉強を教えてる時に寝よつものならぬとして間接をはずして、はめなおしたり。

バカレンジャーの中でも頑丈なものにはマッシュスルスパーク天をかけたりした。

尋常じゃない罰である。

勉強を教えるだけなのに…。

「ルーン姫さん。…」のペナルティはやり過ぎじゃ…。」

「甘やかしたらためにならないんですよ? ネギ先生?」

ルーン姫は笑いながらもつぶやく。

…ネギは、そんなルーン姫に恐怖を覚える。

…まあ、当然である。

(これは甘やかすとか甘やかさないとかの問題じゃなこと思つんどうか? …ルーン姫さんの世界ではこれが普通なんじょつか? …?)

ネギは、もう思うが断じて違う。

「こんな」とすんのはルーン姫のいた世界でもルーン姫だけ。

「先生! 体罰が酷すぎます! …」

「なに言つてゐるんですか? こんなのはまだ軽いほうですわ。」

ルーン姫は「んなのまだ軽いのは当たり前といつ顔を普通にする。

アスナ達はまだこれよつ上があるの…?

…と思つた。

ネギが上がどんなものか少し氣になつてルーン姫に聞いてみる。

「…上つておもにどんなことを?」

ネギがそう聞くとルーン姫は語りだす。

「そうですねえ……超弩級のグレートおバカにやつたことですけど一問間違えるたびにトゲつき鉄球を頭の上に落としたり、ラッシュコを一時間叩き込んだり、間接でステキなメロディーを奏でさせたり…あつ、まだまだ」

「ルーン姫さん…もういいです。」

ネギはルーン姫がまだ色々話さうとするのを止める。

聞くだけでなんか身震いがしてきたからだ。

バカレンジャーの面々も顔が青ざめていた。

ルーン姫のやることの怖さと超弩級のバカがそれもう死んでるんじや…と思つたからだね。

「あー、因みに超弩級のグレートおバカは、ちゃんと生きてますから安心なさい。」

ルーン姫は超弩級のバカの生存を一応ネギ達に伝えた。
ネギ達は、それを聞くとホッとした。

「くだらない話しば、ここまでは勉強を続けますわよ。」

ルーン姫がそう言つと皆は勉強を再開した。

当然、皆はルーン姫が勉強を教えてるときに昼眠りや余計なお喋りはしなくなるのだった。

そしてルーン姫達が地底図書室で過ごしてから日がたち…期末テストまであと一日となつた。

「期末テストとまでもあと一日とこいつといりですか。」

ビビビッ シヤツ

ルーン姫は軽く運動をしていた。常人から見ればとてもじゃないが軽い運動には見えない。

ルーン姫が軽い運動をしていると遠くから悲鳴が聴こえてきた。

「これは、まき絵さんの声? とりあえず悲鳴のした場所に向かいますか。」

ルーン姫が悲鳴の聴こえた場所に向かつと石像（学園長）に捕まっていた。

そしてルーン姫は、その状況を見るとすかさず石像に飛び回し蹴りを食らわせた。

バ「オ！」

「フオー！？」

ズシーン…

ルーン姫に蹴られた石像は捕まえていたまき絵を離し倒れた。
石像が離し落としきになつたまき絵は楓にキヤッチされ無事に助けられる。

そしてルーン姫は倒れた石像に近づき足を持ち…振り回す。

「フオー！？」

「女子中学生を掴んでんぢやないですわよー！」のHロビンジニー…。

「いや、わしづかんなつもりじや…。」

「問答無用ー！」

学園長が言ひわけをしようとしてもそれをルーン姫は聞かず。学園長を水に浸された地面に引き当てるためひやんと言葉を伝え

バシャンー、ゴツ、バシャンー、ゴツ。

「フオー！？」やめ…。

学園長はルーン姫に叩きつけるのを、やめようとルーン姫に言おうとするが絶え間なく叩きつけられているためひやんと言葉を伝え

る」ことができない。

「ふははーなんか楽しくなつてきましたわー。」

ルーン姫は学園長を叩きつけるのが楽しくなつてきてテンションが上がる。

学園長がまだにか言おつすのが聞かずには振り回しては叩きつけを繰り返す。

そつこじてゐにけむに石像（学園長）の首の後ろがわにあつた魔法の本が飛んでアスナ達の方へいつた。古菲が飛んできた魔法の本を無事にキャッチする。

「魔法の本ゲットアル！」

「フオー！？」しまつ…」

バシャン！ゴツッ。

ルーン姫は学園長の言葉を遮りまだ叩きつけ…ていたが。

「飽きた。」

そつとて学園長を投げ捨てる。学園長はとりあえず恐怖から開放されホッとするが魔法の本を取り返すために立ち上がりアスナ達に近づいてくるとする。

「本を返すのじゃー。」

「やだプレー」

「古菲さん。アホな挑発をやってないでやつせと地上に帰らないと

期末に間に合いませんわよ？滝の裏側に非常口があるので早く帰りましょ。」

ルーン姫が、そう言つとタ映がルーン姫に当然疑問に思つたことを聞く。

「ルーン先生…もしかしてとつて出口を見つけていたのですか…？」

「ええとつて見つけましたわよ。」

ルーン姫は、なんでそんな当たり前のことを聞くの？…とまづ顔をする。

「じゃあなんで出口のことを言わなかつたんですか！？」

ネギがそうルーン姫に聞くとルーン姫はいつ答える。

「だつて聞かれなかつたから。」

確かに皆、ルーン姫に出口を見つけたかどうかは聞いてなかつた…聞いてなかつたが…。

「だからって言わないことはないじゃないか！？」

…とまあ当然の反応を返してきたのだった。

しかしルーン姫は、そんなことを気にせずに出口へ向かっていた。アスナ達も石像が向かつて来るのでルーン姫についていき出口へ向かう。

滝の裏の非常口は本来仕掛けがあつたのだが…

「なんか扉に仕掛けがあつたけど破壊しといたので簡単に進めますわよ。」

ルーン姫が破壊してたのでスルーだつたが非常口に入ると凄く長い階段があつた。

アスナ達はこれを登りきらないと帰れないのかと思つが…。

「じゃ、運びますか。」

ルーン姫は数人づつ掴んで上のエレベーターのあるところまでジャンプして皆を運んだ。当然、皆は驚くがルーン姫は、そんなことを気にしない。

下で石像が本ぐぐぐとか言つてゐる気がするが気にしないでおこう。

ルーン姫達はエレベーターに乗り地上に向かおうとするが…

ブブーーーッ

…と重量オーバーの音が鳴つた。

「ここの程度の人数を運べないなんてガラクタエレベーターですわね。しかたありませんわ…はあ…！」

ルーン姫は天井に向かい全身からエネルギー波を放つた。そして即座にネギ達をまとめて抱えて天井に空けた穴から脱出した。

「ルーン先生…？さっきのは一体…？」

夕映はルーン姫にさつきのエネルギー波のことで聞いて聞くがルーン姫にはぐりかされた。

「魔法の本があるからいい点、確実アル～」

などと古菲がはしゃいでいたがルーン姫は魔法の本を奪いとると気功波で消した。

「な、なにするあるか！？」

古菲は魔法の本を消されたことに怒るがルーン姫はアスナ達に向けてこう言った。

「貴女達は私に勉強をみっちり教えられたのですからこんなものが無くても平氣ですわ。…それに物に頼るだなんて真面目に努力したものへ侮辱ですわよ？」

ルーン姫にそう言わるとバカレンジャーの面々は黙るしかなかつた…確かにその通りだから。

「貴女達に最後に言つておくことがありますわ。…悪あがきに徹夜

で勉強などせずに、ゆっくり寝て休みなさい。」「

ルーン姫は、それだけ言つと家に帰つて行つた。

アスナ達はルーン姫に言われた通り徹夜などせずに帰つてゆっくり寝て休むのだった。

そしてバカレンジャー達はテストで高得点を叩きだし2 Aは学年一位になることができネギはクビを免れることができ…そしてネギは正式な教員になることができたのだった…。

余談だが学園長は期末テスト終了後ルーン姫のところへ魔法の本のことを聞きに行つたのだが…

「あれなら消しましたわよ木つ端微塵に。」

「うそん…!…?」

学園長はルーン姫に貴重な魔法書が消されていて大ショックを受けていたようだ…。

三時間目 図書館島とルーン姫（後書き）

ルーン姫「あの子達は超弩級グレートおバカと違つて、みっちり教えれば成長する子達で良かつたですわ！」

作者「そこまである人バカにしなくても頑張つてもできない人なだけなんだから…」

ルーン姫「こつちが必死に教えても平均32点は凄いムカつくと思いますけど？」

作者「うん……まあね……てかあの人のこと話してるけど彼、別にでないんだよねこの小説。」

ルーン姫「別にでなくとも構いませんわね。アイツは。」

作者（……仲間なのに冷たいなあ……。）

ルーン姫「早く戦いとかはないですかねー。」

作者「うーん……。」

ルーン姫「まあ、バカな作者は放つておいて…。

読者の皆さん今回もこの小説を読んで頂きありがとうございます。次回も私の活躍を楽しみにしてくださいな。」

作者「その言い方はちょっと…」

ルーン姫「ふんっ。」

ズドオン！

作者「げほお！？」

ルーン姫「では歸さん。また次回で会いましょう。」

四時間田 ネギ、ルーン姫の"ひじき"を聞く（前書き）

作者「修行つて技修得以外はぱッと終わるんだよな…。」

四時題田 ネギ、ルーン姫の言ひひを聞く

麻帆良学園は終業式を迎えていた。やつすむに明日から春休みと言ひひとだ。

そしてルーン姫はその春休みを利用してあることをしようとしていた。

そのあるじとせ……。

「ネギ、修行しますわよ。」
「えつーー？」

ネギはルーン姫に急にそんなことを言われたので驚いた。
ネギは恐る恐る、ルーン姫に何で急にそんなことを言つのか、訳を聞いた。

するとルーン姫は、なにこいつ忘れてんだ…と不機嫌な表情を一瞬見せるがすぐに表情を戻し、ネギにあの時の約束を言つた。

「アスナさんに魔法バレたことをビビりかしたら何でも言ひひとを聞くと貴方は言つたじゃありませんの?」

ルーン姫にそう言わるとネギは、あつーーと言ひ顔になつて自分の言つたことを思つ出した。

「やつ言ひれば僕、そんなことを言つましたね。

忘れてました…すみません。」

「思い出したならいいんですよ。じゃあ早速、私の家で修行させ

ますわ。」「

そう言つてルーン姫はネギを引っ張つて自分の家に連れて行つた。ネギは何故、ルーン姫さんの家で修行?…と考えたがその訳はすぐ分かつた。

「うわあ…凄いやー何だろこの機械!。」

ネギはルーン姫の中のトレーニングルームに設置されてる機械を見て驚いていた。

見た目が明らかに未来的なものだから驚いても仕方はないだろう。「これは重力を操作する機械ですわ。因みにこれの限界の重力は地球の一億倍ですわ。」

ネギはそれを聞いて目を見開いて凄く驚いた表情をした。

この世界の者にとって地球の一億倍はとてつもないからだろう。

「いつ、一億つて…!?…ルーン姫さんはもしかして一億倍の重力でも動けるんですか……?」

ネギはそうルーン姫に聞くとルーン姫は当たり前と言つた感じでネギに答えた。

「当然ですね。一億倍の重力なんて私にとっては、ぬるいぐらいです。」

ネギはルーン姫が一億倍がぬるいと言つたのでこの人はどれぐらい強いんだ！？…と思つた。

ネギは自分がこのとんでもない人に修行をつけられると思つともの凄く恐くなつた。

ネギが不安な顔をしているとルーン姫がその様子に気づき、気をきかせるつもりでこう言つ。

「魔力トレーニングもちゃんとやるから安心なさいな、ネギ。」

ネギが不安になつてるのは魔法使いとしての修行ができるないんじゃ…とか思つての不安ではないのでルーン姫の言つた言葉じやネギは全然安心することができなかつた。

「まあ、私のすることは基本は基礎能力の向上なので技は自分で考えなさい。」

ネギはルーン姫のその言葉を聞かずに家から出ようと逃げようとしていた。

しかしトレーニングルームの扉は何故か開かない。

「逃げようとしても無駄ですわよ？ 結界を張りましたから。」

「ル、ルーン姫さん。結界張れたんですか！？」

ネギはルーン姫が結界を張れたことに驚く。
どうせこの人は魔法は使えないだろ…とルーン姫が格闘攻撃ばかりするから思つたんだろう。
浅はかな考え方である。

「僕はまだ死にたくありません！」

「大丈夫、死にそうで死なないギリギリラインまでしか私はやりませんから？」

正直それも凄く恐いことだと思つ。ネギはそれを聞いてさうに怯えるがもはやルーン姫から逃れることなど……叶うはずもない。

そして修行は始まる。

「これくらいで叫ぶんじゃないですよ！貴方につけた修行は私が三戦士につけたのより軽いんですよ？」

ルーン姫はそうネギに言うがネギにその言葉は届かなかつた
だつてネギ、氣絶してゐるから。

根性ないですわねえ……起きなさい!!」

そう言ってルーン姫はネギを蹴り起こす。

一
けふ
二
!?

一修行再開ですわ。

「そう言つとルーン姫はネギに再び修行をつける。
時々ネギがモザイクをかけなきやいけないようなあんな情況にもなるがルーン姫が治癒功で治して修行は普通に続行される。」

ルーン姫は師匠としては滅茶苦茶厳しいだけで、ピッコロの様に不意に優しさを見せるなどは特になかった。

ネギは何度も自主規制な姿になりながらも修行に耐える。

最初は『うわーん！もう無理ですよー』などとヘタレていたがその後たびにルーン姫に『デスビームを撃たれ』泣くの止めないと次は当てます』と脅されるのでもう泣かない強い子になった。

えつ？それ恐怖が強すぎて泣けないだけだって？

……そこは気にしないほうが多いです……。

この修行……と言つた拷問に近いことは春休みが終わるまで続けられた。

途中、アスナがルーン姫の家にさすがにネギを心配して來たがルーン姫の一睨みにより軽く追い返された。

ネギは、果たして生きているのだろうか……？

そして春休みは終わり始業式。ルーン姫……だけは始業式にきていた。

……………ネギは？

始業式が終わつたあと当然、アスナがルーン姫のところに來た。

「ルーン先生、ネギをどうしたんですか！？」

「ネギ……………あつーはいこれ。」

ルーン姫はアスナに真っ白な灰を渡した。

「え……………まさか！？ルーン先生……………」

アスナはルーン姫に敵意を向けた。
しかしルーン姫は全く動じない。
…というか笑っている。

「アスナ、貴方なにマジにしてんのですの？さすがに私は弟子を真っ白な灰にすることはありませんわ。私はね。」

「じゃあ、ネギは？」

アスナはルーン姫がネギを真っ白な灰にしてないことが分かるとネギは何故、始業式に来ないのかと疑問に思った。
ルーン姫はアスナの考へてることを読むとネギのことを伝える。

「ネギは私の修行の総仕上げで疲労してるので来れないのですわ。
学園長にはちゃんと休むことは伝えているので大丈夫ですわ。」
「疲労してるから来れないって……………ネギは大丈夫なんですか？」

アスナはネギは本当に大丈夫なのか心配でルーン姫にネギの状態を聞く。

するとルーン姫はニッコリ笑つて答えた。

「ネギは大丈夫ですよ？」

……ただし前のネギはもついませんけどね。」

「えつ！？」

アスナはルーン姫の前のネギはいないと呟つ言葉が気になつた。

アスナはローン姫にそれがどういう意味なのか聞こうとしたがローン姫はいつの間にか消えていた。

「あれ！？ ルーン先生どこに行つたの…？」

ローン姫がどこに行つたかと言つと…

「家はやっぱり落ちつきますわね～。」

家に普通に帰つてただけだつた。

ネギはどうなつてゐるかつて?
……それは次回わかります。

四時闇田 ネギ、ルーン姫の言ひひを聞く（後書き）

ルーン姫「ネギの修行、最初の段階は終了ですわ！」

作者「これでもうあのナヨつてるネギはいないのか……ナヨつて
るネギ好きな人に怒られないかな…………。」

ルーン姫「別に怒られないんじゃないですか？」

作者「だといいんだけどね…………。」

ルーン姫「次回はパワーアップを果たしたネギが出ますわー・読者の
皆さん。必ず見なさい！」

作者「よろしくお願ひします。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4774z/>

魔法先生ネギまZ！

2011年12月28日22時48分発行